

関係各位

特別講演会 『知っておきたい認知症』 アルツハイマー病とその他～
についてのご案内

拝啓

2016 年もスタートし新たな一年が始まりました。皆様方に於かれましてはますますご健勝の事と存じます。皆様方には日頃より私共ボランティア団体「心と手をつなご会」の活動にご理解いただきまして誠にありがとうございます。さて、私共「心と手をつなご会」で定期的を開催させて頂いております厚地脳神経外科病院をお借りしての勉強会ではございますが、本年も継続して開催を予定しております。そこで平成 28 年第一回目といたしまして、東京慈恵医科大葛飾医療センターの神経内科部長の鈴木 正彦先生をお招きしての勉強会をヤンセンファーマ、厚地脳神経外科病院理事長 厚地正道先生のご協力を頂き下記のとおり開催する事となりました。今回の講師でもあります鈴木先生はパーキンソン病に関してのエキスパートでもありパーキンソン関連での治療研究を日々行っておられパーキンソン病、レビー小体病は基より認知症に関しても同じくエキスパートでもあります。そのような先生をお招きしての勉強会は大変、貴重でもございます。是非、皆様方のご参加をお待ちしております。

ボランティア団体「心と手をつなご会」



代表 内田 強

共催：ヤンセンファーマ株式会社

厚地脳神経外科病院

敬具

日時 平成 28 年 2 月 5 日 (金)
時間 19 : 00 ~ 20 : 30
場所 厚地脳神経外科病院 7 階

特別講演 「知っておきたい認知症」 アルツハイマー病とその他

講師 東京慈恵医科大葛飾医療センター 神経内科診療部長

鈴木 正彦 先生

*鈴木先生のパーキンソン病に関する論文が別紙資料にあります

*お申込みに関しましては別紙申込書での申し込みをお願いいたします。また、当日、鈴木先生が認知症に関する質問などをお受けいただく予定です。事前アンケートを添付いたしますので当日、質問してみたいことなどございましたらご記入をお願いします。

「鈴木 正彦先生 知っておきたい認知症～アルツハイマー病とその他～」への参加を希望します。

締め切り平成28年1月20日

事業所名	
連絡先	
氏名	氏名
氏名	氏名
氏名	氏名
氏名	氏名
事前アンケート欄	
当日、鈴木先生にお聞きになりたい質問をお書きください。 (例) パーキンソン病とレビー小体型認知症の違いは？ それぞれの認知症の特徴を教えてください 等	

* 氏名はフルネームをお願いします。又、準備の都合上参加の有無は1月20日までにおねがいします。

お問い合わせ・参加申込書送付先

#1、「心と手をつなご会」事務局 (有料老人ホームオアシス吉野 内)

TEL 099-248-7205

FAX 099-248-7206

メールアドレス area.welfare.project@gmail.com

担当 山下

#2、グループホーム「陽だまりの家」

TEL 099-295-7240

FAX 099-295-7241

メールアドレス uchida@well-care.net 担当 内田

パーキンソン病とは

#パーキンソン病 公開日：2015/10/09



鈴木 正彦先生 東京慈恵医科大学内科学講座神経内科 准教授 東京慈恵会医科大学 葛飾医療センター 神経内科 診療部長

高齢者に多く発症するパーキンソン病は、認知症と同様に今後ますます増えていくと考えられています。難病のひとつとされているパーキンソン病とはどんな病気なのか、東京慈恵会医科大学葛飾医療センター神経内科診療部長の鈴木正彦先生にお話をうかがいました。

パーキンソン病とは

パーキンソン病は、脳が出す運動の指令がうまく伝わらず、スムーズに動けなくなる病気です。1817年に英国の医師ジェームズ・パーキンソンが初めて報告したことから名付けられました。50～60歳代で発症することが多く、ゆっくりと進行します。一般に寿命には大きく影響しませんが、根本的な治療が確立していないことから難病とされています。

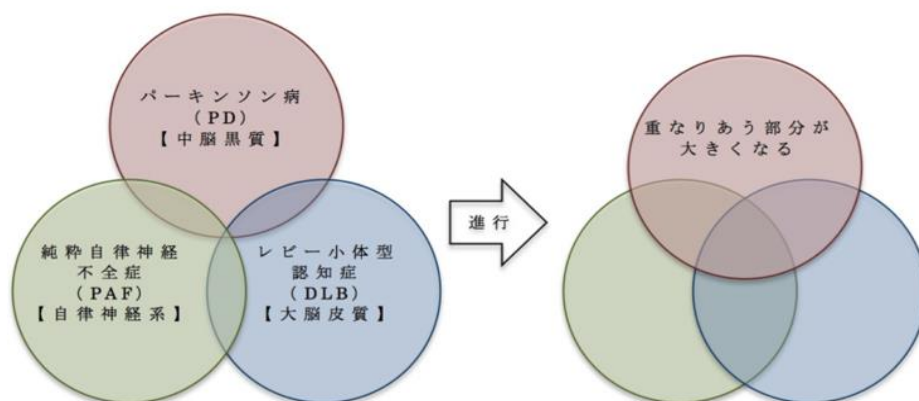
パーキンソン病にかかっている人はどれくらいいるのか

日本では10万人あたり100人～150人(およそ1000人に1人)がこの病気にかかると考えられています。60歳以上では10万人あたり1000人(およそ100人に1人)と、ぐっと多くなります。今後高齢化が進むにつれて、患者さんの数は増えるとみられます。一方、40歳以下で発症する場合は若年性パーキンソン病と呼ばれます。

パーキンソン病の原因は

大脳の下に位置する中脳の黒質にあるドパミン神経細胞が減少することで起こります。ドパミン神経が減ると体がスムーズに動かなくなり、ふるえが起こりやすくなります。ドパミン神経細胞が減少する理由はまだ完全に解明されていませんが、現在はドパミン神経細胞の中にレビー小体(Lewy Bodies)と呼ばれる細胞内封入体が蓄積することが関係していると考えられています。

レビー小体はパーキンソン病以外にも、レビー小体型認知症(DLB)、純粋自律神経不全症(PAF)という病気に深く関わっています。パーキンソン病が進行すると認知症の症状を併発することがありますし、自律神経系の障害(交感神経の働きが悪くなる)によって起立性低血圧などさまざまな障害が起こってきます。



レビー小体が関与する疾患の概念図

レビー小体が発現する部位と、その結果引き起こされる病態の関係は以下のようにとらえることができます。

- 中脳黒質: パーキンソン病 (PD: Parkinson Disease)
- 大脳皮質: レビー小体型認知症 (DLB: Dementia with Lewy Bodies)
- 交感神経 (自律神経系): 純粹自律神経不全症 (PAF: Pure Autonomic Failure)

これらの病気はそれぞれ独立した個別の疾患ではなく、レビー小体病という大きな括りの中で相互に関わりあいながら進行するのではないかと考えられています。このような考え方は、パーキンソン病の研究が進む中で近年広く受け入れられるようになってきました。

また、以前からパーキンソン病の患者さんのうち 5~10% くらいの方には、血縁者にも同じ病気の方がいることがわかっており、家族性パーキンソン病と呼ばれていました。現在ではパーキンソン病の患者さんの中にもいくつかの特異な遺伝子タイプがあることが分かっています。遺伝子解析技術の進歩によって今後さらに研究が進めば、患者さん一人ひとりの遺伝子多型 (遺伝子配列の個体差) によって有効な治療法が開発されることも夢ではありません



鈴木 正彦先生

東京慈恵医科大学内科学講座神経内科 准教授 東京慈恵会医科大学 葛飾医療センター

神経内科 診療部長。核医学による認知症・パーキンソン病の病態解明における第一人者。ビタミン D によるパーキンソン病進行抑制効果研究など、従来の枠組みに囚われない独創性に富むアプローチで他の追随を許さない。研究、臨床のすべてが患者さんのためになることをモットーとしている